



退官教官からのメッセージ

「美感」

機械工学科 清水 勲

私は「光応用技術の開発」を学術研究テーマとし、「環境保全・エネルギー有効利用と地域活性化」を社会的活動分野としている。「レーザ光による微粒子の計測・制御法の開発研究」では国内外で他の追随を許さないと多少は自負している。社会活動では初代の茨城高専地域共同テクノセンタ長として茨城県北地域の活性化活動に携わり、NPO代表理事として県の「新エネルギーフォーラム」(H15年)を立ち上げたり、地域企業の活性化とコミュニティビジネス開拓についてのアドバイスの仕事を引き受けたりしている。40年近く茨城高専で教育・研究に携わり、また地域の活性化に協力を依頼されて活動できたことは幸せだったのだろう。

しかしながら、茨城高専に就職した当時は「中堅技術者を育成する」という教育目標が嫌いで何度飛び出そうと思ったかもしれない。「人の可能性を十分に生かそうとしない」生業の場としての高専の文化度と我が理想や美感との乖離に苦しめられた。このことは今もあまり変わってはいない。人の美感と生き様は学術研究テーマの選定や技術開発の内容にも如実に現れると思っている。

さて、自分の美感を研ぎ澄ます鍛錬の場が何処にあったのか考えてみてもよくは分からない。清水の美感は外から見れば決して立派でもないし歪んでいるかもしれない。しかしながら、やはり学術研究や仕事の質は美感が決め手であるに違いないと思う。自分史を言うと、私は神戸で生まれ、戦争のために二歳で母の故郷の島根に疎開し、食料・物資の乏しい戦後を田舎の自然の中で山野を駆けめぐり海・川で遊び、貧しかったけれども自然の美味を味わい、心ときめく青春・高校時代までをそこで過ごした。今振り返ってみると苦しくはあったが何事にも代え難い幸せの時期であったのかもしれない。美感や好悪の感覚の原点はこの時代の自然や読書によって形づくられたのだろうか。

農業科がある田舎の小さな高校では、学園祭に豚1頭が生ハムやソーセージにされて市民に販売さ

れ、日本中で当時珍しいメロンの香りが2階の教室に匂ってくる得がたい環境で、ときどき東大合格者がでて、意気盛んであった。個性豊かな教師が多くいたが、国語の3教師はそれぞれ源氏、蕪村、漢文を暗記させた。蕪村の春風馬堤曲は断片的に今でも声にでてくる。暗記させられたと書いたがそれは後々まで自分の頭に残り血肉となって、研究テーマのイメージ形成にも役立っているように思え、当時の先生に感謝している。

田舎でも読書を通して世界の古今の最高の師に会うことができた。「The book of tea」(岡倉天心)を読んだせいではないが、大学1年から始めた江戸千家の茶、茶道教授の看板を8年かかって貰った。茶の銘当てや香をきき、花月という何度やっても覚えられない遊びを繰り返し、懐石料理に足の痺れを忘れたこともあった。「川柳狂歌集」(筑摩書房)も傍らに置いてよかった。一首ひねれば、カッとなった頭も冷された。こんな読書による師との出会いなどが自分の感覚形成の原点であったのだろうか。

なお、デュマ、中島敦、司馬遼太郎、吉村昭など私の読書遍歴と仕事の好みを、図書館だよりH4(1992)年7月発行37号に「心のアナログ風景」として書かせていただいていた。歳をとっても美感や好みは昔とほとんど変わらないようである。10年前の当時と比べ多少とも心のゆとりが出てきたのか或いは毫碌してきたのか現在はあまり物事に動じなくなったことが異なる点であるようだ。

もの心がついてから見た、ミケランジェロ「ピエタ像」やボッティチェリ「ビーナス誕生」は將に西洋の文化の精髓、華であった。彼らの創造し引き継いできた美感や文化に圧倒された。宮本武蔵「枯木鳴鶴図」や長谷川等伯「松林図」には研ぎ澄まされた美があり、作者の生き様や到達した心境が感じられて好きなものの一つだ。絵や書籍から多くの良き師に出会った。まだ美感を研ぎ澄ませてよい仕事をしたいものだと、藤沢周平を読みながら居眠りをしているこの頃である。